

支 援 事 業
報 告 集



愛芸アシスト基金

2021
年度

ご賛同いただいた皆様へ

日頃は愛芸アシスト基金にご支援を賜り、まことにありがとうございます。
また本学の展覧会や演奏会にも足をお運びいただき、心より御礼申し上げます。
本学は半世紀にわたり、この中部、東海地域の芸術文化の発展に寄与すべく尽力してまいりました。これまでに美術・音楽の両分野より、アーティストや演奏家、研究者、教育者など、国内のみならず世界で活躍する卒業生を輩出しております。
これも県民の皆様や地域の皆様、そしてなによりこの愛芸アシスト基金にご賛同をいただきました皆様のご理解とご支援の賜物です。
本学はこれからも将来の芸術文化を担う人材を育成すると同時に、大学自らも芸術活動を通して地域に貢献していく所存です。
今後とも皆様に愛される芸術大学として、一層の努力をしてまいります。
何卒、変わらぬご支援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

愛知県立芸術大学 学長
戸山俊樹



2021年度 愛芸アシスト基金 支援事業日程表

01

オペラ公演 歌劇《イドメネオ》
令和3年12月5日(日)
パティオ池鯉鮒(知立市文化会館)
令和3年12月11日(土)、12日(日)
長久手市文化の家

02

愛・知・芸術のもりから
令和3年7月～令和4年3月 計5回
SMBCパーク栄

03

愛知県立芸術大学サテライトギャラリーSA・KURAでの展覧会支援
令和3年4月～令和4年3月 展覧会開催回数:14回
愛知県立芸術大学サテライトギャラリーSA・KURA

04

障害者福祉支援事業としての陶芸アート
出前講座
令和3年11月10日(水)、12月1日(水)、令和4年1月19日(水)
社会福祉法人ひまわり福祉会 杜の家
あいち・アールブリュットサテライト展
令和4年2月22日(火)～27日(日)
愛知県陶磁美術館

01 オペラ公演 歌劇《イドメネオ》



ピアノ、チェンバロの編成による本学大学オペラ《コジ・ファン・トゥッテ》の成功後、新型コロナウイルスへの感染防止対策を施しながら、合唱や管弦楽を伴った演奏会形式の公演を目指した2021年度。オペラ・セリアの傑作、モーツァルトの歌劇《イドメネオ》を取り上げることにしました。

《皇帝ティートの慈悲》以来の全てイタリア語による上演で、特にイタリア語のレチタティーヴォ・セッコ*に当初、大苦戦した学生たちも、熱心な教員たちの指導を経て、見違えるほどの出来になりました。また、感染対策の一環でオーケストラピットを使用しないこと、合唱を舞台に乗せないこと等々、様々な制約がある中、美術学部の佐藤直木教授をはじめとするチームの先生方がアイデア(神殿の柱に見立てた太いロープの束を、歪ませたり、引っ張ったりすることで、シーンの混沌とした様や正常になった様を表した等)を出して下さいました。

合唱は、音楽稽古を経て、通し稽古、場当たりや公演前の総練習で自分の受け持ちシーン以外のシーンを見て、前後のシーンでどのようなことが行われているのかを把握してからというもの、生き生きとした表情で歌うようになりました。

管弦楽について、指揮を担当した佐藤正浩非常勤講師が「日に日に物語を饒舌に語りだし、ストーリーテラーはオーケストラだった」と感想を述べていたほどの出来でした。

《コジ・ファン・トゥッテ》のときには居なかった学部3年生の女声を主体とした各セクションの学生も戻り、舞台裏にも活気が戻ってきました。3回に渡る公演は、舞台スタッフ、衣裳、メイク等各セクションの学生、合唱、管弦楽、教員、キャストが一体となり、盛況の中終演することが出来ました。

本学の大学オペラ公演には、上記の他にも楽器の運搬、チェンバロ調律、照明や音響の依頼、舞台進行、大道具、小道具等、様々な要素が必要なのですが、これらは愛芸アシストに寄附を頂いた皆様の温かい志のお陰で成り立っています。

心からの感謝をするとともに、2022年度の《いつわりの女庭師》公演においても引き続きのご支援を賜りますよう、宜しくお願い致します。

初鹿野 剛(大学オペラ制作責任者)

*チェンバロのような通奏低音を担う楽器に合わせ、個人的な感情、状況説明、登場人物同士の会話を行う部分のこと



02 愛・知・芸術のもりから



名古屋の中心に位置するSMBCパーク栄で開催されるコンサート・シリーズ「愛・知・芸術のもりから」は、令和3年度で12年目を迎えました。このコンサートは、各専攻・コースから選ばれた優秀な本学卒業生・修了生たちが音楽を発信する舞台となっています。若い彼らは、すでに各地で活躍はじめている演奏家たちですが、このコンサートは彼らを後押しする重要なキャリア支援となっており、また愛知芸大の素晴らしさを広く知っていただける絶好の機会ともなっております。

令和3年度もコロナ禍でさまざまな制約がありましたが、声楽、ピアノ、弦楽器、管打楽器の卒業生・修了生から計5グループが出演させていただきました。毎回満席に近いお客さまにお楽しみいただけたことに、心から感謝しております。

今後とも皆様の温かいご支援をいただけますよう、よろしくお願い申し上げます。

安原 雅之(音楽学部長兼研究科長)



04 障害者福祉支援事業としての陶芸アート



愛知県芸術活動支援事業“あいちアール・ブリュット出前講座”は、平成26年度より県内障害者支援施設等において、障害のある方の創作活動を応援するため芸術系大学の教員等が講師となり、障害者支援施設等を訪問して、絵画や陶芸等のアート活動を支援しています。今回、その成果を愛知県陶磁美術館本館第8展示室で開催された「あいちアール・ブリュット・サテライト展 マテリアル～土の声にふれる～」にて、活動の報告と作品展示を行いました。

今回の陶芸制作の支援活動は、磁土を水ガラスなどの糊剤と混ぜ合わせて液体化した泥漿(でいしょう)と呼ばれる状態にした粘土を使って陶板を制作しました。

制作のテーマは、「森」です。参加者の皆さんは、風・空・土のにおい・果実が実った樹・動物・虫など様々なイメージが膨らみます。液体の粘土の流動性を活かし、自由に流し込んで出来る様々な形から想像する面白さを取り入れた試みです。偶然できたカタチや模様から発想して陶板を制作する楽しさを体験します。

泥漿は、濃度によって流動性と粘土板の厚みが変わるといふ特徴があります。泥漿を流すスピードを変化させることや様々な工夫によって思いもよらない表情が出現します。泥漿が入った容器(ペットボトルやドレッシングなどの入れ物)は、体の動きに合わせて持ち方と角度を工夫して動かします。

色粘土は5色を準備しました。泥漿が固まる前に色合いを考えながらグラデーションを重ねることや、固まった泥漿の上から再び色を重ねるといったことで、表面に出来た表情と裏面の表情が異なりユニークな模様となりました。陶板は1250℃で本焼成された後、760℃から830℃で熔ける有鉛の低下度釉薬を筆でぬり、接着(釉着)しました。一人一人が表現した陶板は、参加者の皆さんの協同により30cmと45cmの四角形と30cm×60cm長方形の木製額の画面に再構成し完成しました。森の中で風が吹き、木々がさわさわと囁くような木の葉たちの声を感じるような、おおきな森の陶板となりました。

このような障害者福祉支援活動としてのアート活動は、感性と知性が一体化した活動によって成り立つもので、知・情・意の総合的な活動であると考えています。このアート活動を通じて、“感じる力”と“創作力(ものづくりの喜び)”を育む機会として展開していきたいと思っています。

今回、愛芸アシスト基金支援事業での助成により「陶芸作品制作ノートvol.3」と題する報告冊子とあいちアール・ブリュットサテライト展用木製額を作成させていただきました。この場をお借りして深く感謝申し上げます。

佐藤 文子(美術学部 陶磁専攻 准教授)

愛芸アシスト基金からのお知らせ

クレジットカードによる決済が可能です。

本愛芸アシスト基金は、これまでの金融機関窓口での寄附のほか、

クレジットカード決済による寄附ができます。

クレジットカードによる寄附を希望される場合は、下記のURLからお申し込みください。

<https://www.aichi-fam-u.ac.jp/others/other06/post-1.html>



※ご連絡可能なメールアドレスをご用意ください。

※本学のクレジットカードによる寄附は、F-REGI 寄付支払い(株式会社エフレジが運営する決済代行サービス)を使用しております。

ご寄附の手続き

1. はじめに、メールアドレスをご入力ください。
2. ご入力いただいたメールアドレス宛に、インターネット納付用URLのお知らせをお送りします。
メールを受け取られてから3時間以内にインターネット納付用URLを開いていただき、手続きをしてください。
3. 画面の指示に従い、必要事項を記入してください。最後に内容をご確認いただき、お申込み手続き完了となります。
4. 寄附金の払込み手続きをします。
5. 寄附は完了します。
(最初にご入力のメールアドレスに寄附完了確認メールを送信します。)
6. ご入金のご確認ができ次第、領収書とお礼状をお送りいたします。
(寄附金の領収書は確定申告の際に必要となりますので、大切に保管してください。)



03 愛知県立芸術大学サテライトギャラリーSA・KURAでの展覧会支援



令和3年度のサテライトギャラリーSA・KURAは、コロナ禍の中ではありましたが、愛知芸大方式とよぶ、通気、換気をベースとした感染対策を徹底し、4月からの展示の開催継続を果たしました。個々人の対策や人数制限などは行いつつ、一年間をとおして、無事に開催することができ、多くの方に来場いただきました。

2021年度コレクション展1「Praying for Others 小さな祈りのかたち」(会期:2021年4月2日(金)~4月18日(日))では古くは戦時下の作品から現在まで、さまざまな祈りの形として表現されたものを展示しました。近年の収蔵作品の一つ、青木理恵《立書》は、石峽に中国の詩人、杜甫の句「絶句」を掘り込んだもの、その優しく淡い質感と言葉の重厚さがより文章の意味を深いものとしています。「共鳴~Kyo-mei」(会期:2021年5月15日(土)~5月23日(日))は本学器楽専攻管打楽器コースの深町浩司教授とデザイン専攻森真弓准教授によるプロジェクトの展示で打楽器拍子木(ひょうしぎ)を新たに様々な樹木で作成するという実験的なプロジェクト展示です。「モノとモノの接触」という物理現象で生み出される音がこれほど幅の広い、深遠な奥行きをもっているということを改めて実感する機会となりました。「アーティスト・イン・レジデンス2021水谷一展“歓喜のう

た”」(会期:2021年6月5日(土)~6月17日(木))は前年にレジデンスアーティストとして来校予定だった水谷一氏が大学滞在中に発表した作品です。その作品は大学におけるまた、SA・KURAにおけるコロナ禍での環境を明示的に且つポジティブな場として提示しようとしたアートです。これは、本学の学報No.68における(新型コロナウイルス感染症特集座談会「感染制御はアートだ」)に起因しています。この点に愛知県立芸術大学らしさを見出した水谷氏は、大学滞在中にはきわめて積極的に学生たちと交流を図り、つねに話をしていました。これまで数年間レジデンスアーティストをみてきましたが、こんなに学生たちとひたすら話しているアーティストは初めてでした。そして、年末に開催された「干支展」(会期:2021年12月3日(金)~12月5日(日))は12年目。一巡りしてファイナルとなりました。これまでもバリエーション豊かな表現があり、目を楽ませてくれました。2021年度コレクション展2「小さな部屋で」(会期:2022年2月1日(火)~2月13日(日))は部屋という視点で作品を展示。この視点から見る作品群はとても新鮮で、それぞれの作家の視線や距離感が伝わってくる展示となりました。

関口 敦仁(芸術資料館長)

